

新田次郎著「劔岳 点の記」と小説

(株)かんこう 三村 清志

「劔岳 点の記」は、明治40年北アルプスの劔岳に初(?)登頂して四等三角点を設置し周辺の測量をした、旧陸軍陸地測量部の柴崎芳太郎の約1年間の活躍が書かれている。新田次郎の小説に共通ではあるが、ノンフィクションを読んでいる感じである。

新田次郎の作品には、直木賞作品でもあり白馬岳に50貫もの石を背負って持ち上げた強力な「強力伝」、単独行の登山家加藤文次郎の「孤高の人」、富士山レーダ設置の「富士山頂」、槍ヶ岳を開山した播隆上人の「槍ヶ岳開山」、青森5連隊の遭難の「八甲田山死の彷徨」等山岳関係のものが多数ある。その中で「劔岳 点の記」に似ていると思われるのが、中央アルプス駒ヶ岳への学校登山を扱った「聖職の碑」である。結果は遭難に終わっているが、先生方の葛藤が柴崎芳太郎とダブって見える。ちな

みにこれも30年ほど前に映画化された。

測量そのものを扱った小説では、伊能忠敬を扱った井上ひさしの「四千万歩の男」蝦夷編と伊豆編がある。蝦夷編は、子午線1度の長さの調査と北海道内の地図作成を行うもので、伊豆編はその続編となる。蝦夷編のほうがスケールと内容から読み応えがあると思う。

国土地理院の前身である陸地測量部を扱った小説は読んだことはないが、村上春樹の「ねじまき鳥クロニクル」の“間宮中尉の長い話1, 2”の中で、昭和12年満州国に渡り、関東軍参謀本部の地図を専門とする兵要地誌班に所属し、外モンゴルとの国境地帯での調査活動が述べられている。なお村上春樹の「ノルウェイの森」と「蜚」では国土地理院に入り地図を作りたい青年が述べられている。